

図書館活用教育のすすめ

全国学校図書館大賞受賞校からの発信



鶴岡市立
朝暘第一小学校校長
竹屋 哲弘

少子化や高度情報通信社会が進展する中

で、子どもたちの進路意識や学習動機は大きく変化し、従来発想の授業だけでは積極的な動機づけが得られなくなっている。そのため学習指導要領においても、教科書以外の多様なメディアを活用することが推奨され、それによって教育効果をあげることが期待されている。

しかし学校現場は現在のところ、全体的に時代に即した教育へと脱皮しきるまでには至っていないように思う。教科書一辺倒の学習と、図書館機能を生かし適切多様な資料を選択・使用して行う学習では、学習活動のあり方や成果として身につく学力がまったく様相を異にするのは自明である。読書センター、学習情報センターとしての魅力ある学校図書館をつくり、それを有効に活用し、心づくりの教育や資料活用能力を育てる教育を充実していくことは生涯学習の基礎を築くために極めて重要である。変化する国際社会を力強く生きぬく力を育てる視点からみてもさまざまなメディアを活用して行う教育を充実することが大切である。学校は今、学校図書館活用を学校経営の核に据え、子どもたちに読書を通して心を育て、知の探求の喜びを覚えさ

せることに最大努力すべきである。

学校図書館は学びの宝庫

本校では、生涯学習者の土台となる自学自習力や個性を、小学生の段階からしっかりと育てる。教育への願いや思いを重ねて、みんなでみんなを育てる。この方針を共有し合い、保護者・地域から読み聞かせボランティアなどさまざまな支援をいただきながら、充実した教育が展開される学校づくりに組織的に取り組んできた。そしてその中で、「学校図書館」が夢をかなえるとしてつもなく大きな学びの宝庫であると改めて考えさせられることとなった。私もこれまで学校図書館を大切に教育を進めてきたが、まだその教育機能を十分広く活用しきっていないかったことに深く気づいたのである。

図書館活用教育への組織的取り組み

本校には学校司書と図書主任の連携の中できめ細かに整備された「教育活動に

流

つけていく学校になれば、図書館もさらに磨きがかかり、一層大きな力を発揮することになる。こうして教員の意識改革と組織的取り組みが研究的に行われた。日常的に培われた読書力を土台に、心を育て学び方を身につける授業に図書館活用を広げることで本校の教育改革を志向したのである。

子どもが育った、学校が変わった

研究的で根気強い取り組みの中で大きな成果が見えてきた。平成十四年度の子どもたちへの本の貸し出し冊数は、一人平均年間百十七冊。九年前の五十一冊と比べ二倍以上にもなった。活字離れ、読書離れが叫ばれる中、本校の学校図書館は毎日始業前に、本好き、図書館好きの子どもたちであふれんばかりである。

本や図書館を介して子どもたちの会話がはずみ、子どもたちには生活を見つめ、助け合つてともに歩む心が育った。資料活用能力など学びの力が育った。組織的な図書館活用で学校の教育力が総合的に高まった。地域・保護者と子育てへの願いや思いを重ねる教育連携が進んだ。読書をすすめる魅力ある図書館づくり、気軽に調べ学習ができる図書館づくり

がすすむにつれて、授業をはじめとする学校全体の教育活動に図書館の教育機能を精一杯に生かそうとする教師集団が生まれた。高い読書力を土台に、どの教科も授業が多様に展開し、図書館の資料を多面的にしかも気軽に活用する調べ学習が多く見られるようになった。学び方が身についていくのが実感できる。参考とした本の出典を明らかにしながら違いや課題に気づき、自分なりの考えを深め伝え合う子どもの姿が日常のものとなった。学校には「勢いと特色」が生まれ、教師も保護者もそれを誇りとするようになっていく。

学校研究として、本校教員は図書館活用を視野に入れた国語科指導の研修を積み重ね、授業における指導力が質的に高まった。その結果、子どもたちの学力は確実に向上し、生涯学習の土台も身についてきている。授業はもちろん、さまざまな教育活動において、本や人とのいい出会いを意図的、積極的に作り、指導の仕方を工夫することで小学校の段階から生きる上での必要な高い教育を施すことが可能であることを実感する。図書館を活用しさえすればよいという単純な発想ではなく、図書館活用の教科指導法や、発達や心理に合わせて配慮した運営の在り方などについての計画的、継続的な研修が大変大切であること、またこの実践は、地域・保護者と思いを重ね、公立図書館なども連携して取り組むことで一層大きな成果が上がることも明らかとなった。

図書館活用で、教育の改革を

私どもは、このたび日本学校図書館振興会並びに社団法人全国学校図書館協議会から、

潮

本校の図書館活用教育の実践を高く評価いただき、全国学校図書館大賞（二十八年ぶりの受賞、三例目、小学校では初）の栄誉に浴した。前述のような明らかな

成果をみたことから、私どもは本校のような組織的、多面的な取り組みが是非とも全国の学校に広がってほしいと願い、現在その普及活動に手をそめているところである。学ばせてほしいということでも県内外から訪問者も多くなっている。学校司書、司書教諭、図書主任の果たす役割の大きさ、学校職員全体が意識改革し組織をあげて図書館活用に取り組むことの大切さ、保護者・地域との教育連携を学校図書館を介して一層すすめることの重要さに、教育委員会、学校などの教育関係者も保護者も理解と関心を深める必要があると思っている。みんなで学校図書館の教育的意義を再確認し合いながら図書館を十分に活用し、授業や教育諸活動の改革・改善を全国的に積極的にすすめるべきである。

司書教諭、学校司書の専任配置を

国民の期待にこたえる学校教育の充実のため、学校図書館の機能を教育課程に生かす司書教諭が必要不可欠なものとされ、平成九年六月に学校図書館法の一部が改正された。そしてそれにより平成十五年度からは全国的に十二学級以上の規模のすべての学校で、所属教員の一人が司書教諭として兼務発令された。兼務発令とはいえ、私はこれを画期的な

ことと受けとめていくが、同時にできるだけ早く正式に専任配置されることを心から願っている。加えて、将来的に司書教諭が正式に配置されたとしても、それだけで望ましい図書館活用教育が推進されるに十分なものは決してないとも考えている。本校には、市当局の行政努力で以前から学校司書が正式配置され、地道な努力が積み重ねられていたからこそ、図書館活用の教育実践がこのように幅広く行われるまでになったのである。学校規模にもよるだろうが、近い将来、全国の学校に司書教諭はもちろんのこと、学校司書もともに専任として配置され、分担と協働の作業が適切に行われてほしいと願っている。図書館職員がいつも学校図書館にいて適切な支援をしていくからこそ、子どもたちは本好き、図書館好きになっていくのである。私は、学校図書館を取り巻く環境、特に人的環境は全国的にまだまだ未整備の段階と認識しているところである。

竹屋 哲弘（たけや てつひろ）

鶴岡市立朝陽第一小学校校長。

1969年東北大学大学院教育学研究科修士課程修了後、国立鶴岡工業高等専門学校助教授（1981年～）、山形県教育庁指導課主任指導主事（1990年～）、山形県立酒田響子学校校長（1995年～）、山形県教育庁庄内教育事務所所長（1997年～）などを経て、1999年から現職。

鶴岡市在住。